

2.2 特別支援教育におけるICF及びICF-CY活用の 背景等についての一考察 -ICF及びICF-CY活用経験者等へのフォーカスグループインタビューを通して-

教育支援部 主任研究員 徳永亜希雄
教育支援部 総括研究員 松村勘由
企画部 上席総括研究員 大内進

1. 趣旨と目的

特別支援学校学習指導要領等の解説書案の中でICFについて言及され、また、ICF-CYの日本語訳版発行の動きがある中で、今後、特別支援教育の中でのICFやICF-CY（以下、ICF/ICF-CY）の活用の動きが拡大することが予想されました。

そのことを踏まえ、特別支援教育の中でこれまでICF/ICF-CYを活用しようとしてきた背景は何だったのか、現時点でどのような成果や課題が浮かび上がってきているのかについて整理しておくことは意義深いと考えました。それらの点については、実践報告の中等で散見されますが、まとまった研究は見当たりませんでした。

そこで、特別支援教育の中でICF/ICF-CY活用の動きが始まって数年が経った今、実際に活用してきた人、しようとしてきた人によるフォーカスグループインタビューでの語りについて質的に分析することを通して、活用の背景、成果及び課題についてあらためて検討し、今後の活用に資する知見を得ることを目的としました。

2. 方法

本研究では、これまで特別支援教育の中でICF/ICF-CYを実際に活用してきた人、しようとしてきた人から、それぞれの活用の背景、成果及び課題について聴取しやすくするために、単独のインタビューに比べて参加者同士の関わりによってインタビュー内容についてのより豊かな語り期待されるフォーカスグループインタビューという形態をとりました。

(1) フォーカスグループインタビューの方法

①インタビュー参加者及び実施日程等

本研究のICF/ICF-CY関連研究について、これまで何らかの形で研究協力経験のある者の中で、特別支援教育にかかる学校現場においてICF/ICF-CYを活用した者又は活用しようとした者11名を対象としました。

平成21年2月及び3月にそれぞれ約100分間、以下のグループで実施しました。

1回目：特別支援学校の教員3名、寄宿舎指導員1名、小・中学校の特別支援学級在籍をする子どもの保護者1名によるグループ。ICF/ICF-CY活用に関わった年数の平均は、

3. 8年間だった。

2回目：特別支援学校の教員5名，活用開始当時は特別支援学校教員で現在は小学校教員1名によるグループ。ICF/ICF-CY 活用に関わった年数の平均は，5.6年間だった。

②インタビューの内容

インタビューの内容は以下のとおりです。

- 1) 学校現場に関するどのような背景，理由を持ちながら，何を目的として，どのようにICF/ICF-CYを活用しようとしたのか？
- 2) 活用の結果，得られた成果はどのようなことか？課題にはどのようなものがあるか？
- 3) 今後，学校現場での活用について，どのような展望を抱いているか？

③インタビューの手順等

メインインタビュアー（以下，メイン）による促しにより，インタビュー項目1）及び2）について参加者が座席順に発言し，3）については，挙手した参加者をメインが指名し，発言するようにしました。各質問項目について一巡したところで互いに質疑応答・討議を行いました。録音機器操作，記録，タイムキーパーはサブインタビュアー（以下，サブ）が1名が行いました。

（2）分析の方法

発言内容の逐語録を作成し，参加者の確認を得た後，以下の様な手順で分析を行いました。

- ①ある一定の意味のある記録のまとまりに短いコードを付けていく「オープンコーディング」をメインが行う。
- ②サブによるオープンコーディング結果の確認後，メインとサブとの協議を通してオープンコーディングの修正を行う。
- ③オープンコーディングを要約して，より抽象的・概念的なコードを割り当てる「焦点的コーディング」をメインが行う。
- ④サブによる焦点的コーディング結果の確認後，メインとサブとの協議を通して焦点的コーディングの修正を行う。
- ⑤メインとサブによる協議を通して生成された概念の分析を行い，図式化する。
- ⑥フォーカスグループインタビューの様子を参観した研究所スタッフとの協議を通して適宜修正を行う。

3. 結果

2グループ分の語りから得られたデータから2-（2）の手続きを経て生成された概念カテゴリーについて，インタビューの流れに沿って記します。

（1）活用の背景や理由，目的

活用の背景や理由としては，【障害名や障害特性に偏重した，それまでの子どもの見方と関わり方への違和感】，【問題行動や気になることの原因を子どもにのみ求める見方への違和感】，【教員

間や関係職種間の共通理解・連携の弱さについての問題意識】等のカテゴリーが生成されました。

【障害名や障害特性に偏重した、それまでの子どもの見方と関わり方への違和感】、【問題行動や気になることの原因を子どもにのみ求める見方への違和感】についての具体的な語りとしては、次のようなものがありました。

「子供ってみんな生活が一人一人違うのに、どうしても指導が画一的になってしまって、あれしなさい、これしなさい、こういうふうにして卒業していく。卒業したらこういうふうにしよう、みたいなことがいつもこう、なんとなくみんななどの子も同じになってしまうというところにすごく疑問を感じていたし」

【問題行動や気になることの原因を子どもにのみ求める見方への違和感】についての具体的な語りとしては、次のようなものがありました。

「障害だから仕方がないみたいな。ある意味自分もあつたかな、というところはちょっと否めないなという。で、知ったときに、やはり自分を振り返ってみると、ちょっとまずいんじゃないか、みたいな。」

【教員間や関係職種間の共通理解・連携の弱さについての問題意識】についての具体的な語りとしては、次のようなものがありました。

「個別の指導計画とかできたわけですよ。その子の指導をみんな一貫して、系統立ててやっていきましょうというようなことでやってきたのだけれども、書く人によって全然違ったのですよ。やはり指導計画とか。それではだめじゃない？」

総じて、特別支援教育にかかる学校現場での解決すべき課題への認識があることが示唆されました。また、それぞれの参加者は、これらの背景や理由を持ちつつ、一方で【総合的・多面的な見方への賛同】や【環境因子としての教員という考え方への賛同】、【参加の視点への気づき】等のICF/ICF-CYの特徴に賛同に関連したカテゴリーが生成されました。これらについての具体的な語りとしては、次のようなものがありました。

「障害という一面だけに焦点を当てるのではなくて、多面的・総合的にとらえて参加というゴールに向けて、担任だけではなく、多くの先生たちが共通の考え方で」

「いわゆる概念的枠組と、よくある図を一番初めに同僚から見せられたときに、自分たち教員も子供にとっては環境因子の一つなんだよと言われたときに、すごい何かショックだった。いろいろな意味で。あ、それで今までこうもやもやしていたものが説明できるというのと、逆にこう責任感とというところで、この考えってなんかすごいな」

したがって、各参加者は特別支援教育実践の改善充実への寄与という目的のもとで、ICF/ICF-CYの活用に取り組もうとしてきたことが示唆されました。これらの概念については、図1のとおりに図式化されました。

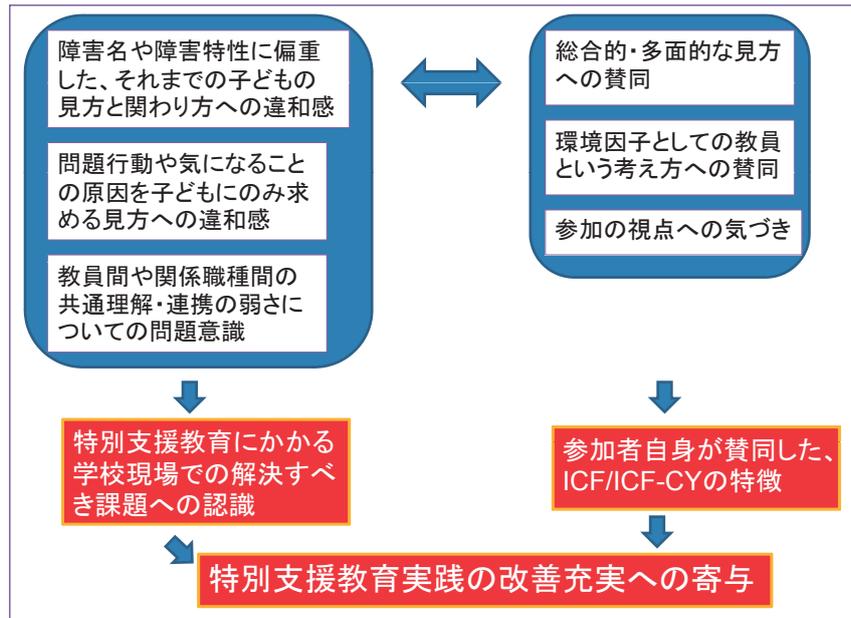


図1 活用の背景や理由、目的

(2) 活用方法

活用方法としては、【概念的枠組み（※参加者は同義で「理念」と呼称）に基づいた子どもの見方】というカテゴリーが生成され、このことはほぼ全参加者に共通したものでした。また、【概念的枠組みを模した「ICF 関連図」を用いた子どもの実態把握と課題の設定】、【「ICF 関連図」作成を通じた教員間の共通理解】

【「ICF 関連図」を資料として活用した保護者や関係職種との連携】、【個別の教育支援計画と個別の指導計画、授業の流れとつながりの整理】、【生活地図の併用】

【チェックリスト等を通じた分類項目の活用】等のカテゴリーも生成され、これらはツールとしての側面としてまとめることも可能だと考えられました。また、これら概念的枠組みとツールとしての側面は以下の語りに代表されるように不可分な関係にあることが示唆されました。

「今年1年間やってみて思うことは、〇〇さんがおっしゃっていたように、ツールを使ってわかることもあるし、ツールを使っていく中で、やはり理念として押さえて、理念、概念として押さえておかなければいけない部分もあったりして。そのところは、今の現時点では両輪かなと自分は思っています。両輪。どう考えるかといったところと、どう分析するかというのが、両輪である必要があるなどというふうに思っています。」

これらの概念については、図2のとおり図式化されました。

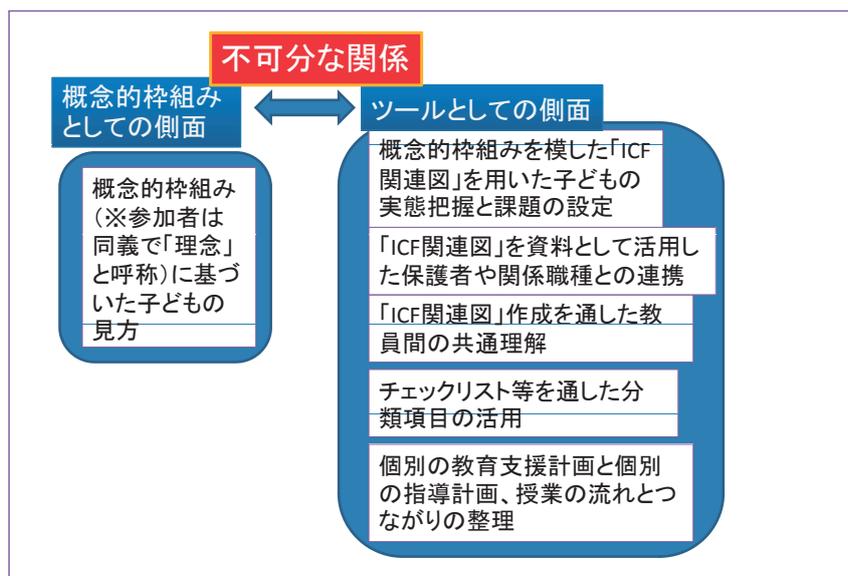


図2 活用の方法

(3) 活用の成果と課題

活用方法としては、【総合的・多面的な子どもの理解と課題の設定】、【実行状況と能力との違いへの理解】、【教員間や関係職種間の共通理解と協働】、【共通言語としての役割】、【相互作用という見方】、【課題や目標設定の根拠】などのカテゴリーが生成され、これらは子どもの見方のパラダイムシフトとしてまとめてとらえることも可能だと考えられました。

一方で、課題として生成された【以前からあった考えという抵抗感】や【新しいものへの抵抗感】、【ICF/ICF-CY ありきの視点】、【評価点活用の難しさ】などのカテゴリーは心理的な側面としてまとめてとられ、前記のパラダイムシフトと不可分な関係にあるものとして考えられました。このことは次の語りが象徴的に表していると考えられました。

「課題としては、パラダイムシフト、さっき成果で上げたのですが、課題もこれが難しいなど。うん。なかなかその巨人の星的精神というのが、いわゆる生徒指導で十分というかね。そういった辺りがますます難しく、難しいなど今実感しています。」

その他の課題としては、【ツールとしての「ICF 関連図」作成の難しさ】や【話し合いの時間の確保】、【資料としての「ICF 関連図」の見方の難しさ】、【授業改善へのつながりの難しさ】などのカテゴリーが生成され、これらは技術的な側面としてまとめてとらえることも可能だと考えられ、本研究の成果の情報提供等を通してその改善に貢献できると考えられました。これらの概念については、図3のとおり図式化されました。

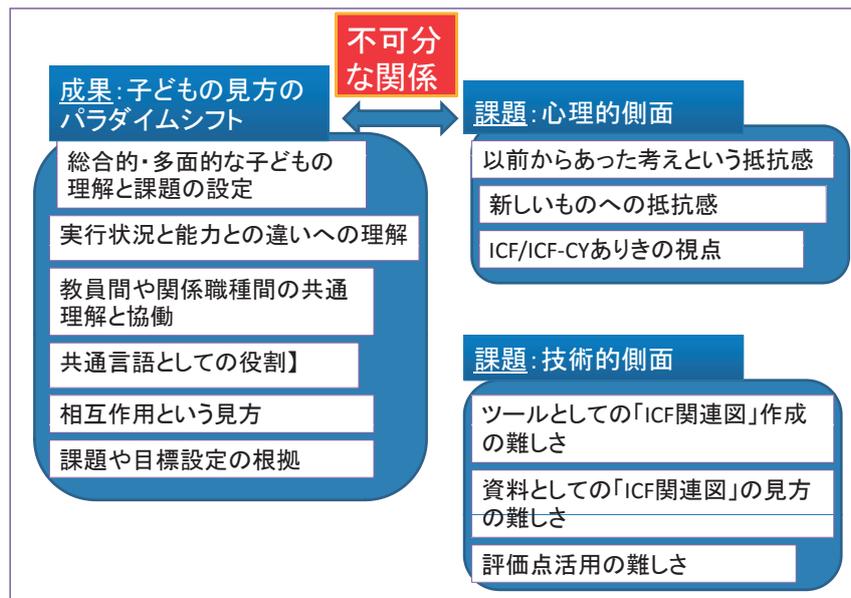


図3 活用の成果と課題

(4) 今後の展望

今後の展望としては、【本人主体の取組】や【実践的実績の蓄積】、【概念的枠組みの理解と取組の継続】、【理解啓発・研修】、【中心となる人材の育成】、【学習指導要領解説書案への記述の影響】、【特別支援教育という文脈】などのカテゴリーが生成されました。

【本人主体の取組】としては、以下の語りに見られるように、教員等の支援者のためのツールとしてだけでなく、生きる主体としての子ども自身のためのICF/ICF-CY活用という今後のあるべき姿が示唆されました。

「学校の中でこれからやっていきたいのは、指導者が活用するのではなくて、子供たちが活用してほしいと思います。学校の中にいると、子供が自分が生活しにくいとか、こういうことが不自由だなどかを感じる場面というのはすごく少なくて、それはわたしたちは環境因子がなんとなくわかっているとか、指導の体制がわかっている、支援とか介助がわかっているということがあって、子供たちが自分が将来の生きにくさを感じる場面がすごく少ない。」

また、今後のICF/ICF-CY活用のニーズの高まりや活用の拡大を想定し、【理解啓発・研修】、【中心となる人材の育成】、【学習指導要領解説書案への記述の影響】が示唆され、具体には以下のような語りがありました。このことについては、本研究や科学研究費補助金「特別支援教育における国際生活機能分類児童青年期版活用のための研修パッケージ開発」による具体的な研究成果を通して貢献していくべきものだと考えられます。

「ICFの考え方というのはどういうものなのかとか、どういう部分をどんなふうに使っているのかという自分たちの理解というところをもっと研修しなければならないというところがありますよね。」

「指導要領（解説）に載ったことで、これからますますトップダウンというところも出てくるのかなと思うんですが。それで初めにICFの活用ありきとなるのは、ちょっと避けたいなど。やはりボトムアップあって、で、授業があって、そういう視点に立って授業をしたら変わってきたという積み重ねと

か、先生方の実感がわかないと、どうにも浸透していかないんだと思うんですね。やはり ICF があって、こういうふうに活用するんだよ、と上からだけでは難しいかなと。」

4. 考察

活用の背景や理由として生成された概念カテゴリーは、①特別支援教育にかかる学校現場での解決すべき課題への認識と② ICF/ICF-CY が有する、参加者自身が賛同した特徴であり、①の解決や②を生かした特別支援教育の推進が活用の目的となっていました。また、ICF/ICF-CY の概念的枠組み（理念）としての側面とツールとしての側面とを大別しながらも、実践上は両輪且つ不可分なものであるということが示唆されました。

また、成果の象徴的なものは、子どもの見方についてのパラダイムシフトとそれに基づく共通理解や協働ですが、反面そのこと自体が難しさとして浮き彫りになりました。今回の参加者が職場内等で ICF/ICF-CY 活用の中心的な存在であることから、一個人としてだけではなく、組織運営上の課題も多く見受けられ、今後の活用を検討するため、特に推進の中心的な立場について検討するために有意義な知見を得ることができました。

5. 終わりに

今後、特別支援教育の中での ICF/ICF-CY 活用の動きが拡大することが予想されることを踏まえ、今回は特別支援教育の中でこれまで ICF/ICF-CY を活用しようとしてきた背景や理由、目的、活用方法、成果、課題等について整理することができました。今後の活用に向けた貴重な知見を得ることができ、本研究として取り組んでいる具体的な活用方法やツールの開発のための貴重な示唆を得ることができました。今後の ICF/ICF-CY 活用のニーズの高まりや活用の拡大が想定される中、研究や研修を通して、本研究所が貢献していく必要があることがあらためて確認されました。

文献

- 1) S. ヴォーン・J. シナグブ・J.S. シューム（著）、井下理（監訳）、柴原宜幸・田部井潤（翻訳）（1999）. グループ・インタビューの技法. 慶應義塾大学出版会.
- 2) 佐藤郁哉（2008）. 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.